

ほんとはネ いじめっ子じゃないよ

ふるさとを中国にもつ少年の記録

善元幸夫



善元幸夫

日本語学級の子どもたちがつくった中国の農民学校のはり絵





ポブラ・ノンフィクション⑪

ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ

定価 880円

発行 1984年2月 第1刷©

著者 善元幸夫（よしもと ゆきお）

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポブラ社

〒100 東京都千代田区須賀町5

1271

株式会社

株式会社

ありがとうございます。

7764

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



はじめに

この話の主人公清有君しゅじんこう ちん せい いうじんという子どもは六年前、中国黒龍江省こくりゅうこうしやうから引揚ひきあげてきた子どもです。有君いうじんは日本にきて、ぼくが先生をしている、東京の江戸川区立葛西かさい小学校の日本語学級に入学しました。日本語学級にほんごがくというのは、中国や韓国かんこくから引揚ひきあげてきた子どもたちがはじめて日本語を学まなぶ学級です。

この本は、有君いうじんが九才さいで日本にきて、小学校二年生のクラスに入い学がくし、やがて中学校一年生になるまでの六年間の記録きろくです。有君いうじんは自分にどんなにつらいことがあっても人を信しんじていく子どもです。ぼくはこの六年間いうじんで有君いうじんから「やさしさ」とは何かということを教おしえてもらったような気がします。

有君いうじんは日本の名前を清野君夫きよの きみおといい、小学校に在学ざいがく ちゅうがく中数おおくの作文や、詩などをかきました。これをもとにして、ぼくと有君いうじんの「心の成長せいちやう記録きろく」としてこの本をかきのこそうと思いました。

もくじ

生まれでたなやみ

有君ヨージンとの出あい 7

おも荷にを背負せった有君ヨージンの生おいたち 19

はじめての日本

お父さんは日本人 27

日本、そしてあたらしい学校 34

おいつめられていく有君ヨージン

みんながにげていく 39

テレビの上に石が六つ 48

中国によせる心こころ 57

有君ヨージンと、まわりのできごと 67

トイレで給食きゅうしょくを……。背せ中にゴミを……。 74

負けるが勝ちか 79



「人間」について勉強して

人間の子は人間？ 85

「しょくぶつにんげんも、にんげんです」 96

ささえあう友だち

わたし、日本語こわいです 115

ほんとうの美しさとは 131

出あいをもとめて

先生、ぼく日本人になるの 139

「としあきくんは、心の中でたたかっている」
有君と、二人だけの「卒業式」 150

中学生になって——いじめられる側^{がわ}にたつ

友だち 175

いじめる人にもさびしさがある 181



表紙絵 日本語学級の子どもた

ちがつくったはり絵。

はたらく中国の子ども。

写真提供（敬称略）

菊地信夫

高槻 彰

生まれでたなやみ



ヨージン
有君がこれから日本語を勉強する葛西小学校。
かさい

ぼくが　びょうきするとき

とうさんも　かあさんも

つかれはてていました

ぼくは　心こころの中なかでないていました

どうしてぼくのような子どもが

生うまれたのだろう

ひとにはめいわくかけるし　こまらせるし

でも　いまはうれしい

こうやって生いきているからです

有君ヨージンとの出あい

一九七七年の二月、ぼくは二十六才さい。先生になっていちばんおもしろくなりかけていたころのことです。子どもたちをかえしてしまった、だれもない日本語学級のぼくの机つくえで仕事をしていました。

すると、教室のうしろの戸とがあきました。お父さんと、お母さんにつれられた、体からだのわるそうな男の子が元氣なくはいつてきたのです。そのあとから妹いもうとらしい女の子二人がおくれています。その男の子は目がわるいのか、目をぐっとほそめ、顔をゆがめていました。今いまにもたおれそうに机つくえに手をつき、ぼくにちかづいてきました。その子が、これからお話ししようとする有君ヨージンという少年です。

「先生、子どもをよろしくおねがいます」

有君ヨージンのお父さんとうは中国語でそういいながら、入学の書類しよるいをみせました。それは、有君ヨ

君^{ジン}が入学するために日本にきてからかかれたものです。中国のときのことがかかれて
ありました。

『五才^{さい}の時に発見ー右手、にぎることができない。ことばはよい。よだれがでっばな
し、脳^{のう}がすこしたりない』

調書^{ちようしよ}にはたったこれだけしかいてありません。日本にきたとき、有君^{ヨージン}は大人^{おとな}から
こうみられたのでした。これをかいた調査官^{ちようさかん}はなにが良かったのでしょうか。ぼ
くはとまどつてしまいました。

「あなたが清有君^{チンヨージン}？」

「……………」

ぼくは、もう一度ゆっくりききました。

「あなたが清有君^{チンヨージン}？」

有君^{ヨージン}は、じっと考^{かん}えています。

「……はい。ぼく、清有君^{チンヨージン}です。中国^{ちゆうごくじん}人^{じん}です」

「とはいいくつですか」



日本語学級の窓には「にほんご」とかかれています。教室のすみに民族人形があります。

「……九才きうさい」

有君ヨージンは話しながらも目をほそめ、そわそわしながら、まわりをみています。

有君ヨージンのお父さんとお母さんかあは不安ふあんそうにぼくと有君ヨージンのやりとりをきいていました。

「あなたは、妹の桂榮ケイエイ？」

「はい、そうです。これはお兄さんと五才きいの妹の桂華ケイカです」

「うん、しっかり答こたえられたね。有君ヨージンと桂榮ケイエイは明日あすから学校で日本語の練習れんしゅうだよ、が

んばろうね」

「はい」

桂榮ケイエイはしっかりした口調くちようでこたえました。お父さんとお母さんかあは、やっと安心あんしんした

ようでした。

「これから、有君ヨージンと桂榮ケイエイをよろしくおねがいます」

有君ヨージンのお父さんはそういつて立ちあがりました。有君ヨージンはヨロヨロしながら、みんな

からすこしおくれて教室をでていきました。

その足どりは、いかにもたよりなさそうでした。

あたりはだれもいなくなって、教室はふたたびシーンとなりました。日本語学級の子どもは、中国や韓国かんこくで生活していたため日本語はぜんぜんできません。しかも有君ヨージンはそのうえに体からだの右半身が不自由ふじゆうです。これから先さき、有君ヨージンは日本語学級でどうしたらいいのでしょうか。

つぎの日になりました。

ぼくが朝教室にいくとみんな元気よく、たのしそうに遊んでいました。

有君ヨージンと、桂榮グイヨンは教室のすみにじっとたっていました。

「先生、あの子だあれ」

「あたらしい友だちだよ、さあ勉強だ。きょうはだれ」

「ぼくです。きりつ。……れい」

「おはようございます」

「おはようございます」

「きょうは、中国からあたらしい友だちがきました。名まえは……」

「先生、知しっているよ。清有君チンヨージンと清桂榮チングイヨンだろう」

こういったのは、宝林ボーリンでした。宝林ボーリンは、お母さんかあから、こんどあたらしい子どもがくるということをきいていたのです。

「どうして宝林ボーリンは、そんなことよく知っているの」
こうきいたのは、黄文ホワンエンでした。

「うん、ぼくなんでも知っているよ。ぼくのお母さんは、じぶんも引揚げ者ひきあげだからといって、今でも中国からくる人の世話せわをしてるんだって……。清チンさんは黒龍江省こくりゅうこうしやうからきたんだよ。有君ヨージンのお父さんは小さいときに中国にいったんだ」

「宝林先生ボーリン、もう話はいいですか」

ぼくがこう話したのでみんなは、おかしくってわらってしまいました。

「宝林ボーリンがみんないだったので、先生は話すことがあります。今日きようから二人ここで勉強きんぎやうします。みんな友だちになってください。いいでしょうか」

「はい」

元気げんきよく子どもたちは返事へんじをしました。そして、つづけて、「それでは、宝林先生ボーリン、二人に日本語学級せつめいの説明せつめいをしてくださいませ」というと、みんなは、おかしくてまた

わらいながら宝林ボーリンの方をみました。宝林はちょっとはずかしそうでしたが、それでも説明せつめいはなかなかじょうずにやりました。

「ええ、日本語学級は、今、中国と韓国かんこくからきた友だちが、葛西かさい小学校に、十七人います。はじめは、この教室で勉強して、だんだんできるようになると、普通学級ふつがっきゅうに通級きゅうします。今、日本語学級は、初級しよきゅうと中級ちゅうきゅうのクラスがあります。二人とも、きたばかりだから初級しよきゅうです」

宝林は、中国語でまとまりのよい話し方かたをしました。二人ともすこし安心あんしんしたようです。

「それからいいわすれたけど、日本語学級の目標もくひょうは、『一人はみんなのため、みんなは、一人のため』です。先生は、中国からきた子どもは団結だんけつが必要ひつようといっています」

宝林はつづけて、スラスラいったので、ぼくはよけいに、有君ヨージンの体のことがきになりました。

「はい、これで紹介しょうかいはおわったけど、二人にあいさつをしてもらいます」
こういって、ぼくは二人を黒板こくばんのまえにつれていきました。

「ぼく……清有君です……ぼく中国人です……」

有君はボソボソといったような話し方でした。つぎに桂榮です。

「わたしは、清桂榮です。わたしたち日本にきたばかりです。どうぞよろしくおねがいします」

桂榮はつかえないで、きれいに答えました。

「さあ、勉強をはじめるけど……」

「先生、質問です。どんな字かくんですか」

「そうだね、二人ともじぶんの名前をかいてください」

ぼくがこういったあと、桂榮はさりとかきましたが、有君の方はなかなかうまくいきません。たまりかねたのか、桂榮が兄の名前を手つだってやったのです。

「先生、有君どうしてかけないの……」

まわりの子がききます。

「うん、あのね、有君は小さいとき、病氣したの。だからよくかけないんだ。みんなも、有君の世話をよくしてやってください」